IS 黒き自由の翼

餓鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　黒き自由の翼

【Ｎコード】
Ｎ８２９０Ｕ

【作者名】
餓鬼

【あらすじ】
人の温もりを忘れた少年がＩＳ学園に編入し幼馴染と再会し少しずつ人の温もりを感じて誰かを守るための力を求める少年の物語

キャラ設定（前書き）

ただの自己満足で書いたものですので、ご了承ください。

キャラ設定

ＩＳ＆キャラ設定
名前　黒沼（くろぬま）　悠（ゆう）
年齢　１６
身長　１７２．５ｃｍ
体重　５４．５ｋｇ
　長年髪を切っていないため髪が腰のとこまで伸びているため女性に間違われることもある。（本人は全く気にしていない）
　一夏と箒とは幼馴染み、６年前に束に拉致されている。
　しかし、実際は４年間逃亡し倒れていたところを束が見つけ介保するが以前の記憶がなくとても冷たい性格になったため束が人の温もりを教えるためにＩＳ学園に編入させた。

専用ＩＳフリーダム、一応、第三世代だが実力は第四世代なみ　色は黒（ＩＳはほとんどガンダムＳＥＥＤのフリーダムのまま）

武装　ＭＭＩ－ＧＡＵ２　ピクウス７６ｍｍ近接防御用機関砲×２
ＭＡ－Ｍ０１　ラケルタ・ビームサーベル×２
Ｍ１００　バラエーナ・プラズマ収束ビーム砲×２
ＭＭＩ－Ｍ１５　クスィフィアス・レール砲×２
　ＭＡ－Ｍ２０　ルプス・ビームライフル
対ビームシールド

特殊装備　武装モジュール「ミーティア」

単一仕様能力：質量ある残像
　その名の通り残像を作り移動する為、相手の錯乱に使える。（参考はＦ９１ガンダムで）

プロローグ

いま俺はテレビで思いがけないニュースを見たそれは
『大変です！　あの篠ノ之束が二人目の男、ＩＳ操縦者が居ると宣言をしました』
何てことだ！　これはどう考えても俺の事じゃないか！　くそぉ、束め俺を殺す気か！
俺はダッシュで束が居るラボに向かった。
「ユッ君どうしたの」
「おい、今のニュースは何だ！」
「何だもないよ～束さんはただあることを報告しただけだよ」
いつもこいつが考えている事が全く分からない。
「俺はそんな事より、今すぐ奴らを潰さないといけないのにどうするんだよ」
「なら、ＩＳ学園に入りなよ。もぉ、手続きは終わっているからこの時間に校門に行ってね」
俺は渡された紙を見て驚いた入学式は明日だった。
「おい、これはどんなイジメだ」
「大丈夫♪　ユッ君なら今から出てもたぶん間に合うから」
「たぶんかよ！」
くそ！　いきなりすぎて時間がない。
「わかったがアイツは出来てるのか？」
「完璧だよ～束さんを嘗めないで欲しいな」
そのまま、投げ渡されたのは黒い指輪だった。
「仕方がないから行くが俺の部屋には入るなよ、それとアイツらの情報頼む」
「最初のは無理だけど、二つ目はＯＫだよ」
「部屋に入るのはいいが、書類だけは見るなよこれが守れないのなら分かってるよな！　束」

「う、うん、分かってるよユッ君」
「じゃ、俺は行く」
俺はＩＳを展開しＩＳ学園に向かった。
「面倒くさい」

クラスメイトは全員女子ですか？　いいえ、男が二人います

「ここがＩＳ学園か広いな」
この学園に着き一言がそれだった。
「お前が編入生か？」
後ろから女性の声が聞こえたから答えた。
「ここの教師か、そうだ俺が編入生だ」
俺が振り向きながら言ったらその女性は驚きながら言った。
「お前は、黒沼なのか？」
「なぜ、俺の名前を知っている、どこかで会ったことがあるのか？」
「何を言っているお前は６年前私たちの目の前から消えたんだぞ」
「６年前？　何を言っている俺は……これ以上は言えん、そろそろ教室に案内をしてくれないか？」
「あぁ、すまないついて来てくれ」
俺は名の知らない教師の後ろをついていき教室の前についた時、立ち止まった。
「私が合図をしたら入って来い」
「少しいいか」
「なんだ」
「あなたの名前は何だ」
「あぁ、すまない、私は織斑千冬だ一年お前の担任をする」
そのまま織斑先生は教室に入った瞬間に声がした。
『げえっ、関羽！？』
パァンッ！　教室から凄い音が出たがその後、教室の女子の声が響いた。
『静かにしろ！　さて、ＳＨＲを始めたいが編入して来た奴がいるから紹介する。黒沼、入れ』
俺は無言でドアを開け檀上に上がり自己紹介をした。
「俺は黒沼悠だ、趣味などはない。だが、一つ言っておく俺に関わ

るな、命の保証がないぞ」
「「「……男？」」」
「それ以外に何に見える」
「「「きゃあああああーーーーっ」」」
耳が痛い早く終わらないだろうか。
「すごくカッコいい」
「クール系でしかも、守ってくれそうなきがする」
そんな声の中一人の男の声がした。
「お前、悠なのか？」
「お前は誰だ、人違いなら後にしろ」
「悠！　いい加減にしろ！　お前が消えた時、俺たちは心配したんだぞ！」
いきなり席から立ち俺の胸倉をつかむ前に男は宙に舞った。
「なんだ貴様、俺は知らないと言ったら知らないんだ。それ以上なにかするのならばこちらは手段を択ばないぞ」
俺は床に倒れている男に殺気交じりで呟いた。
「織斑、席につけ」
「でも、千冬姉」
「織斑先生だ、それと、黒沼ここで人殺しはするなよ」
「知らん、俺は俺の邪魔をするものを消すだけだ」
俺はそのまま、空いている席に腰を下ろした。

その日の休み時間俺は女子から質問攻めにあった。
「ねぇ、黒沼君は好きなものとかある」
「ない」
「なら、今付き合っている人わ」
「いない」
「じゃあ、「す　まないが静かにしてくれないか」」
俺は束が人を追い返すときに使ったらいいよと言われた笑顔で言ってみたら、周りの女子が顔を赤くしながら「ごめんね」と呟いてどこかに行った。これで安心して考え事が出来る。
「ほとんど全部わかりません」
集中が切れた時に聞こえたのはそんな間抜けな声だった。
どんな奴でも一般常識はわかるだろ。まぁ、見るからにアイツはバカそうだからしょうがないか。と心の中で呟いていたら織斑先生にあてられた。
「黒沼は解らないとこはないか」
「ありません、こんなのは一般常識ですから」
「なら、織斑に「教えません、そんな時間ないんで」言い終える前に答えるな」
そのまま授業が続き休み時間に入った瞬間に俺は身を隠すかのように教室から出て休み時間ギリギリまで身を隠す事が出来た。質問攻めは嫌いだな。
「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る大表者を決めないといけないな」
クラス代表そんな詰まらないものをここではそれを用いて対抗戦をするのか詰まらんな。
「はいっ。織斑君を推薦します！」
「なら私は黒沼君を推薦します！」

俺の名まで挙げられた。それはそうだ男が二人しかいないからどちらかを挙げて楽しもうとしているのは見え見えだ。
「では候補者は織斑一夏、黒沼悠……他にはいないのか？　自薦他薦は問わないぞ」
織斑は慌てるのが遅いそれにしてもこいつを見ていると何かが頭の中に流れる。
「待ってください！　納得がいきませんわ！」
その言葉とともに金髪の女は立ち上がり文句を言い始め最終的には日本の悪口を言い、織斑が言い返しにイギリス料理の事を口にした。
「お前らはバカか？」
「「何（何ですって）！？」
「お互いの国の事を言い合ってなにが楽しいんだ三下共が」
「私が三下ですって」
「そうだろ、お前はただの代表候補生なのだからその国の評価を下げることをお前がやっている。この意味分かるか？　わからないだろ、特別に俺が教えてやる！　お前が自分の国に泥を塗ってるって事だよ！　もう少し言い方ってもんを考えねェと自分の国を悪い方向に持っていくことを考えろと言ってるんだよ。そして、織斑！お前は怒って前が見えずに他国の悪口を言うのは関係ないがもし、この事でイギリスが何か文句を言って来たら、そんな方向に持っていったらお前は責任が取れるのか！　そんな事を考えて口に出しやがれ！　三下野郎ども」
その言葉とともにクラスは静かになり俺にほとんどの奴の視線が向けられている。
「なら、決闘ですわ！」
「おう。いいぜ、。四の五の言うよりわかりやすい」
なんなんだこいつらはもっとダメな方に進んでいった。
「そこのあなたもですわよ！」
その後、織斑先生によってこの事態の収拾を付けられ一週間後に

決闘することになった。

俺の部屋は何処ですか？　私と同じ部屋だ？（前書き）

今日もこのまま、暴走していくＺＥ☆

俺の部屋は何処ですか？　私と同じ部屋だ？

「全く分からない」
「なんだと！　織斑、俺は貴様の為に分かりやすく教えているのに何故わからない」
俺は今、織斑に勉強を教えている？　なぜ、こうなったかと言うと。

「お願いだ！　俺に勉強を教えてくれ」
俺の目の前には土下座をしながら一生懸命お願いしている織斑の姿がある。
「断る！」
「お願いだ！　教えてくれ！」
「俺以外に聞け」
「無理だ！　俺はお前に聞きたいんだ！」
ヤバイな、これ以上こいつがいらんことを言ったら周りの奴が織斑に男性好きと言うステータスが付きその後俺にも何らかの噂が立つかもしれない。
「分かったから喋るな」
そして、冒頭に戻るのである。

「お前はバカすぎる、教えているこっちが頭痛くなってきた」

「それはひどいぞ」
「俺は頭が痛くなったから帰る」
「待ってくれぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
そのまま廊下に出て廊下を歩いていたら織斑先生に出会ってしまった。
「黒沼」
「何でしょう」
「今日からお前は療で暮らしてもらうぞ」
「いいですよ、俺、家ないし」
「なら、この二つのカギから一つ選べ」
その手に握られていたのは二つのカギだった。
「このうちの一つは相部屋だ」
「じゃあ、相部屋の方を下さい」
「なぜだ」
「織斑が相部屋だと襲われるかもしれないからです」
「ならこのカギをやる」
そのままカギを受け取り１０２５室に向かった。
「開いている」
部屋に着きカギを差し込んでみると開いていた。
「何か知らんが、身の危険を感じる？　気のせいだよな！」
中に入ったら誰もいなくて安心した矢先にハプニングが起こった。
「誰かいるのか？」
シャワーのある部屋から女性の声が聞こえてきた！　ヤ・バ・イ！
「ああ、同室になった者か。シャワーを使っていた。私は篠ノ之……」
あっ、目が合ってしまった。
「今から出るから心配するな、箒」
そっと、横を通り部屋から出る前に箒に木刀で殺れた。

私はやってしまった一年振りに再会した悠を木刀で気絶させてしまった。
「大丈夫か！悠」
私は悠の顔を見た瞬間に顔が赤くなった、その訳は悠が私の手を握って来たからだ。
「このまま時間が止まってしまえばいいのに」
そぉ、呟き私は悠をベットに寝かせ睡眠をとった。

二人の関係は何ですか？　許嫁らしい（前書き）

以外にサブタイトルを考えるのに苦戦します。

二人の関係は何ですか？　許嫁らしい

「悠、すまない」
「大丈夫だとさっきから言っているだろ」
「だが、顔は怒っているぞ」
「悠、箒待ってくれ」
後ろの方から織斑が走ってきた。
「何の用だ、三下？」
「やっぱり、怒っているぞ」
「三下って酷いな」
そのまま、食堂に向かい朝食を食っている、俺の朝食はコーヒーだけだ。なぜ、コーヒーかと言うと朝は何も入らないがコーヒーだけは毎朝飲んでいるからと言った理由で飲んでいる。
「それにしても何も食わないんだな」
「朝は食欲がないからな」
「悠」
「なんだ、箒」
「まだ、怒っているのか？」
「俺は本当に食欲が無いだけだ」
今、テーブルには俺、その横に箒、箒の隣に織斑、その前には女子が三人座っている。
「思ったけど、黒沼君と篠ノ之さんなんか仲いいね？」
「二人の関係は何ですか」
目の前に座っている二人が質問をしてきたから普通に答えてみた。
「俺と箒は許嫁らしい」
「「「「……」」」」
「悠、もう一回言ってくれ」
「許嫁らしいと言っただけだが」
その言葉とともに周りが騒ぎだした。

「そんな！　チャンスが消えた」
「私、狙っていたのに」
うん、五月蠅いなこのままだとまたキレそうだよ。
「本当なのか？　箒」
織斑は現実を受けきれないのか箒に質問をした。
「……／／／」
箒は顔を赤くしながら頷いた。
なぜ、こんなことになっていると言うと、一年前の剣道全国大会の前日の事だった。
「ユッ君に重大発表だよ」
「なんだよ」
「実は君には許嫁がいるんだよ」
「知らなかった」
「それでね～明日、応援しに行って欲しいんだよね♪」
「わかった、場所わ」
「お！　以外に乗り気だね♪」
「少し興味があるだけだ」
それから、箒に会い許嫁の事を聞いたら顔を真っ赤にして「姉さんが」と呟いてから頷いた。
「平和だな」
そんな事を呟きながらコーヒーを啜った。

これはＩＳですか？　これが俺のＩＳだ？

月曜になりクラス代表戦の日になった。
「黒沼、準備は出来ているか？」
「いつでも」
俺が今纏っているＩＳは初期化されていた。たぶんこの仕業はあのウサ耳女の仕業だとすぐに分かったがな。だが、この程度のハンデなら何も痛くはない。
「悠」
「何だ、箒」
「勝ってこい」
「当たり前だ」
ピットに出てきた俺だがセシリアはそれに気づかず何かを呟いていた。
「織斑、一夏」
「おい、始めないのか」
「いつから、いらしてたのですか？」
「お前が呟き始めたころだ」
「行きますわよ」
そのまま戦闘になったが俺の武器はアーマーシュナイダーだけだった。
「ふざけていますの？」
「ふざけているかはその目で見てからにしろ」
俺はブルーティアーズの攻撃を全てよけながら攻撃をしようとした時、ＩＳが突然止まってしまった。
「くそ、もう少し簡単な操縦をすれば良かったな」
「残念でしたね」
ブルーティアーズのスカート状のアーマーが外れて動いた。
「くそ」

そのまま俺にミサイルが当たり爆発をした。

◇

「悠っ……」
俺の横では箒がモニターをみて声を上げていた。
「千冬姉、なんで悠の武器はあれしかないだ」
「織斑先生だ、黒沼のＩＳはまだ初期設定のままだ」
そんな、あんなに凄い動きを見せてまだ、初期設定のままだんて。
「だが、もう終わっただろうな」
千冬姉はモニターを見て苦笑していた。

◇

――フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。
（遅かったな）
俺はボタンを押したとともに俺を包んでいる――いや、今や我が身そのもののＩＳが光の粒子に弾け消え、そしてまた形を成す。
「やっ来たか、フリーダム」
俺は煙に包まれているがそこからミーティアの後ろ部分だけ展開しミサイルを地面に向けうちさらに土煙をだしその中を駆けセシリアを斬りつけ試合を終わらせた。
『試合終了。勝者――黒沼悠』

◇

「最後のはなんだ」
「教えることは出来ない、機密事項だ」
試合が終わりすぐさま質問を受けた。
「何があってもか？」
「そうだ、これはお前たちには関係が無い事だ」
「関係が無いだと」
織斑はキレながら近づいてきた。
「おい、次は無いと忠告したはずだ」
織斑の後ろに周り持っていたナイフを動脈に近づけた。
「やめんか」
「次、俺の秘密を知ろうとするのなら構わず殺す」
そのまま部屋に戻り睡眠をとった。

お前達は何者だ！　ザフトそれだけで十分だ！（前書き）

やっちまったぜ

お前達は何者だ！　ザフトそれだけで十分だ！

俺は夢を見ているそれは明るい夢だった。

「約束だぞ」

誰だ！　俺には明るい現実なんていらない消えてくれ！消えろ、お願いだから消えてくれ！

「はぁ、はぁ」

「大丈夫か？」

俺はつらくて目が覚めてしまった。

「大丈夫だ」

この頃あの夢ばかり見る何故なんだ！　俺はこんなに明るい世界で生きてきたか？　否それは違う俺は作られある研究の完成品！しかも、人殺しの為に作られた、それがコーディネーター、俺は憎んだそして俺は同族を殺した！　研究所を壊した！　そんな人生で明るい世界なんてなかった！　俺は汚れている！　人を殺す為に作られた物なんだ！

今の俺は何をするにも無気力だ、そんな時俺を喜ぶ者が現れた。

「おい、俺に出撃命令を出せ」

それはクラス代表戦に乱入してきなＩＳに見覚えがあるわけでもない、ただ俺は壊せるのなら壊したいだけだ。

「黒沼、教師には敬語を使わんか！　これを見ろ」

「5分もあればそんな物解除できる」

俺はノートパソコンを出しハッキングをした。

「これなら1分もかからん」

「お前どこでそんな技術を学んだ」

「ウサ耳に習った」

ブロックが解けた瞬間に俺は走りアリーナに行った。
Ｓｉｄｅ悠ＥＮＤ

Ｓｉｄｅ一夏

「くそ、何だよコイツ」
そろそろシールドエネルギーがなくなる
「邪魔だお前たち」
後ろを向くと悠がＩＳを展開して立っていた。
「邪魔ってなによ！　あんたの方が邪魔でしょ」
「お前たちは一撃で奴をたおせるのか？」
そうだ、俺達にはまだない、たぶん一生、悠の横に立って戦う事は出来ない。俺はまだ無力だ！　強くなりたい！　悠の横に立たい！
俺は拳をつくりながら言った。
「負けるなよ」
「誰に言っている、一夏」
Ｓｉｄｅ一夏ＥＮＤ

俺は一夏達をどかせアンノーンに瞬時加速を使い相手の懐に入りビームサーベル二本使い相手の手足を切った。
「これでお終いか？」
「まだだぜ」
「ザフトがなぜここにいる」
赤いＩＳが降りてきた。
「それは、お前をこちらに引きずり込むためだ」
「一人で何ができる」
「違いますよ今日はただの挨拶ですよ、完成品」

その瞬間、ＩＳを貫通して俺の肩に銃弾がめり込んだ。
「何をした！」
「あなたを本当の完成品に近づけただけですよ」
そして、赤いＩＳは逃げ俺はそのまま倒れた。

これがあなたの選択でしょうか？　そうだ、これが！　運命〇〇〇の選択だ！

これが、運命石の扉の選択だ！

これがあなたの選択でしょうか？　そうだ、これが！　運命○○○の選択だ！

Ｓｉｄｅ一夏

あの日からまだ悠は目覚めない。
「起きてくれよ悠、あれから色んな事があったんだぜ――――――お願いだから起きてくれよ、悠」

Ｓｉｄｅ一夏ＥＮＤ

Ｓｉｄｅ悠

また、俺は夢の中にいる今回は今までより長くとても明るく俺が願ってはいけないものだった。
「約束だぞ」
彼女は決まってそのセリフを言う、今回の夢はここで終わらない。
「絶対に俺が箒を守ってやる！　だからもう泣くなよ」
少年はそんなカッコイイセリフを言った。
(ヤッパリ、オレニハコンナマブシイユメナンカミルシカクハナイハヤクメザメナイカナ)
まだ続く眩しすぎる夢がやめてくれ俺には眩しすぎる！　やめろ、
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ

やめてくれ！
「そんな夢が嫌ならこちらに来ては如何でしょう？」
「そうだ、俺には深い闇があっている！　俺はそちら側の人間だ！」
「近々、あなたの元に我らの人間を送りますので」

「ゆ、悠」
俺が目覚めた瞬間に箒に抱きつかれた。
「離せ」
「嫌だ！　私はもう離さない」
「おい、黒沼これは命令だ自分の事を話せ」
「いきなり質問ですか、まぁいいでしょう
俺は人間ではない作られた物だそして俺みたいな物をコーディネーターと呼ぶ、その中で俺は完成品と呼ばれ今まで作られた物の中で最高のデキが俺だ解ったか俺はお前らより上の存在だ！　呆れた

だろ」
「違う！　お前は俺の友達だ！」
ちらつかせるなよ俺にそんな明るい世界を見せるんじゃねぇよ！
「何が友達だ馬鹿馬鹿しい、俺とお前はただの赤の他人だ！　違うか！」
「思い出させてやる！　俺達が本当のお前を思い出させてやる！」
何だよさっきからちらつく記憶の断片は俺は全て消した筈だ！
もう、思い出さないように深くて真っ暗な闇の中に消した筈なのに。

海には行かないんですか？　俺には水着がない！（前書き）

ＨａＨａＨａＨａＨａＨａＨａＨａＨａ

海には行かないんですか？　俺には水着がない！

臨海学校とはなしかしこれで奴らとの接触が出来るな、その時、右ポッケに入っている携帯が動いた。
『自由時間に森の方に来て下さい、そちらに我々の同士を配備していますので』
コイツ等はプライバシーを知らんのか！　別にこの携帯にはウサ耳のアドレスしか入ってないからな。
（これで、俺は本当の闇を手に入れる事ができる）

――――森

何処にいる、人を呼び出すなら簡単所にしろ。
「こっちだ」
後ろを振り向くと茶髪の女性が立っていた。
「あんたは砂漠の虎か」
「そんなに有名だったか？」
「そんな事は置いといて早く終わらせる」
「そうだね
じゃ、死ね」

いきなり銃を発砲してきたが難なくよけた。
「何をする」
「合格だな
明日、迎えに来るそれまでに支度をしておけ」
そのまま一日がたった。
「ちーちゃ～～～～～ん！！！」
その言葉で俺の寝ていた目が開いた。
「……束」
おい、この状況は不味いだろ。
「やあやあ！　会いたかったよ、ちーちゃん！
さあ、ハグハグしよう！　愛を確かめ――――ぶへっ」
ちゅちょなくアイアンクローだと、こいつやはり化け物だ！
「何か言ったか黒沼」
「いや、何も」
「ゆっくん駄目だよそっちに行ったら」
「何を言っている束」
「何のことかな？」
なぜだ、お前がその事を知っているんだ！
「そうだ！　薬のんでる」
「いや、飲んでないが」
「なら、オチューシャだね」
注射された後なんだか知らないが気分が悪くなってきた。
プライベートチャンネルで誰からか通信がきた。
『もう直ぐそちらに福音が来るその時に貴様の回収を行う』
「たっ、た、大変です！
お、おお、織斑先生っ！」
来たか！　これで俺は自由になれるこの明るくて幸せなとこから暗く最悪な所に行けるこれで俺は本当の闇を感じることができるんだ！
しかし、なんだこのもやもやとした感じはなんか懐かしい感じが

するこの感じはいったい何なんだ！
「すいません、気分が悪いので部屋に戻ってもいいですか？」
「しょうがない、戻って休め」
俺は一礼をし外に出てＩＳとダミープログラムを展開し空に飛翔した。

ネタが浮かびません！　作者がそれ言ったらアウト！（前書き）

悠「まじで言ってんの」
餓鬼「無理だ！　俺には文才がないんだ」
悠「元からないだろ」
餓鬼「挫折していい？」

ネタが浮かびません！　作者がそれ言ったらアウト！

「お待ちしていましたよ
黒沼悠君」
「あんたが来るとはな、ラウ・ル・クルーゼ」
俺の目の前でプロヴィネンスを展開していた。
「私は反対ですよ、貴方みたいな完成品がいるから我々は毎日のように殺し合いをし、その中で残った人間だけで作られたザフト
しかし！　実際にやってきたことは貴方を完成に導く為のサンプル、そんな事のために我々の仲間は命を落としていった！
貴方が居なければこんな事にはだから私は貴方をここで殺します」
ヤッパリ理由はそれか、仲間そんなのいらない、殺すか
「こいよ、殺してやるよ」
『未確認ＩＳ接近中』
福音かやはり俺の命を狙うのにコイツ等は測っていたのか。
いいだろう、皆殺しにしてやる。
「最高のコーディネーターの力を見せてもらいましょ」
「来い！　ミーティア」
俺はミーティアを展開し射撃中心で攻撃を開始した。
「ちまちま動くな！」
余りコイツを使いたくないが射撃から格闘に替え攻撃を開始した。
「どうした、当たれば肉が無くなるぜ」
「これが貴方の力ですか、ですが此方はまだ、落とされる訳には行かないのでね」
ここだ！　一瞬で格闘から射撃に替え相手の右足を撃ち落とした。
「くっそお！」
「これで、終わりだ！」
ミーティアを解除しビームサーベルを展開し相手の懐に入り両腕、左足を切断した。

「これで、終わりだ！」
『ＩＳ三機接近中、その内の二機は白式、赤椿』
「今です」
プロヴィネンスの背中に付いているドラグーンを使ってきた。
「何、ビームサーベルだと」
その内の二機にビームサーベルが付いている物があるその内の一機が腹部に刺さった。
「くそがぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
そのまま怒りにまかせビームサーベルで切り裂いた。
「はぁ、はぁ、はぁ」
ヤバイな体力が、それに腹部の怪我も酷いな。
『そろそろ現実と向き合わないか』
誰だよ俺に話しかけてくるのは！
『俺はお前の失った記憶だ』
嘘だ！　俺にそんな物は必要ない！
『嘘を付かなくても俺にはわかる』
黙れ！
『あそこを見ろ』
そこには福音に手こずっている織斑と箒だった。
『お前はアイツ等をほっとけないだろ』
俺にはそんな世界なんかあわない！
『良いんだぜ、コッチに戻って来いよ』
俺は福音の攻撃を受けようとしている一夏と箒を瞬時加速で近づき福音の攻撃を全て受け、冷たい海の中に落ちた。

Ｓｉｄｅ悠ＥＮＤ

Ｓｉｄｅ箒

「箒、そんな――――そんな寂しいことは言うな。
言うなよ。
力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。
らしくない。
全然らしくないぜ」
「わ、私、は……」
私は浮かれていた専用機を貰い悠に近づけたと思っていただけだった。
「箒ぃぃぃっ！！」
一夏が私を庇おうとようとしたが横から私が知るＩＳが来て私達を庇い攻撃を全て受け海に落ちていった。
「ゆっ、悠ぅぅぅぅ」
私は悠を追いかけるかの様に私も海に沈んだ。

Ｓｉｄｅ箒ＥＮＤ

ネタが浮かびません！　作者がそれ言ったらアウト！（後書き）

ま、まだ、終わる訳にはいかないんだぁぁぁぁぁ！

行くぞ！　ストライクフリーダム　はい、ネタバレ来たぁぁぁぁぁぁぁ！

それは悠がまだ小学二年だった頃のことだった。
「おーい、一夏、箒帰ろうぜ」
悠が扉を開いた時に聞いてしまった。
「おーい、男女～。
今日は木刀持ってないのかよ～」
「……竹刀だ」
「へっへ、お前みたいな男女には武器がお似合いだよな～」
「……」
「しゃべり方も変だもんな～」
箒は、答えない。
三人の男子が取り囲んでからかっている。
「一夏、ここであったこと千冬さんに喋るなよ」
悠は一夏にこっそり近づき小声で話しかけた。
「やーいやーい、男女～」
「……うっせーなぁ。
黙って聞いてたらよ女子囲んで苛めて楽しいですか？」
「げっ、黒井」
「どうしたんですか？　続きしなくていいんですか？
もしかして、俺が来たからビビって手が出せないとか？　そんなんだったら最初からやらなかったらいいんじゃないかな？」
怒りながらも冷静に相手をコッチに向かせることをした。
「何でコイツ助けるんだよ」
「お前、この男女が好きなのか？」
「な～に？　人を助けるのに好き、嫌いなんているのかよ
それにな、友達が苛められてて助けない奴がいるのかよ！」
悠がその言葉と共に地面をおもいきし踏んだ瞬間少年達はビビり逃げて行った。

「よし、掃除して帰ろうぜ」
その姿はさっきまで怒っていた姿ではなく優しい姿だった。
その後ありもしない事実を言われ親を呼び出され怒られた後、千冬さんにボコボコにされた。
「不幸だぁ」
「……お前は馬鹿だな」
数日後、放課後の修行を終え黄昏ていた悠に、久しぶりに箒が声をかけてきた。
「何かだよ」
「あんなことをすれば、後で面倒になることを考えないのか」
「仕方ないだろ。バカなんだから」
悠は箒にリボンを渡した。
「な、なんなんだコレは」
「つけとけよ」

『わかっただろ』
「そうだな」
真っ黒な空間でしゃべっているが他からただ一人で喋っている痛い子に見える。
『それでも、お前は力を欲するか？』
「いらねぇな！

俺が欲しいのは誰かを救う力だ！」
その瞬間、真っ黒だった空間は真っ白になった。
『合格だ』
「自分に合否を決められるのは嫌じゃねぇな」
『行ってこい！』
「行くぜ！
来い、ストライクフリーダム」

復活しました？　なぜ、疑問系！

「ぐっ、うっ……！」
ぎりぎりと締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる。
福音の手は硬く箒の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へと進化した『銀の鐘』が紅椿の全身を包んでいた。
（これまでか……。情けない……）
ぽうっと光の翼が輝きを増していく。一斉射撃への秒読みがはじまる中、箒の頭の中にはただ一つのことだけが浮かんでいた。
―――会いたい。
―――悠に、会いたい。
―――すぐに会いたい。今会いたい
―――ああ、ああ、会いたい。
「ゆ、う……」
知らず知らず、その口からは悠の名前を呼ぶ声が出ていた。
「悠……」
さらに輝きを増す翼に、箒は覚悟を決めてまぶたん閉じる。
イィィィンッ……！！
『！？』
突然、福音は箒を掴んでいた手を離す。
「遅れて済まない」
その顔はあの頃よく見ていた顔だった。

◇

「悠っ、悠なのだな！？　体は、傷はっ……！」
慌てて声を詰まらせる箒の元へと飛んで、俺は答える。

「待たせたな」
「馬鹿！！」
久し振りにその言葉を聞き安心して答えた。
「仕方ないだろ。バカなんだから」
俺は手に持っているものを渡す。
「り、リボン……」
「誕生日、おめでと」
「あっ……」
七月七日。今日が箒の誕生日。
とはいえこれは記憶が無くなる前に買ったんだがな。
「使えよ」
「あ、ああ……」
想いだけでも
「俺には守りたい世界があるんだ」
俺は振り返り福音にスーパードラグーンを飛ばし、ビームサーベルで斬りかかった。

「行くぞ！　一夏」
「おう！」
その時俺の瞳の奥で何かが割れる音がした。
「一夏、俺がアイツを誘導する」
「わかった」
「ミーティア」
俺はミーティーアを展開し福音の動きに合わせて全弾撃った
「いっけぇぇぇぇ！」
その後、上手く一夏が福音を停止した瞬間に疲れがきたのか俺は倒れた。

俺は誰かを守れたのか？

「俺、生きてるのか？」
「当たり前だ！」
振り返ったら、ポニーテールに戻っていた箒がいた。
「心配かけたな」
「かけすぎだ！」
箒は泣きながら抱きついてきた。
（ヤバイ、胸が当たってる）
「ありがとな、箒」
そっと、箒の頭を撫でた。
「違うだろ」
「ただいま」
その言葉と共に箒の唇が俺の唇に当たった。
「悠！　好きだ！」
「俺も好きだよ、箒」
また、キスをした長く深く、まるで二人は愛を確かめるかのように。

これで三巻の内容を終わります！　死んだものに敬礼

さっきまでちーちゃんは私と一緒に白式の種明かしをしていた、そしてちーちゃんには珍しくたとえ話をしてくれた。そしてこんなたとえ話がきた

「なあ、悠は一体何者なんだ」

「ゆっくんはね実は今回もう一機出てきたＩＳの――――なんだよ」

私はそういって帰って行った

「何だと！」

その声は闇の中に消えていった。

？？？Ｓｉｄｅ

「やはり、クルーゼが邪魔をして覚醒し記憶が蘇った」

「良いじゃねぇかよ」

「これで私達の夢は実現する」

「クルーゼの死は無駄ではないな」

「さぁ、第二段階の始まりだ」

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「疲れた」

「お茶だ」

箒にお茶を貰ったのはいいが実はお茶持ってるんだよな。

「なあ、悠お茶持ってないか？」

「しゃーねえな、ほらよ」

俺はポケットに入れてたお茶を渡した。
「サンキュー」
「気にするな」
何か知らんが後ろから凄いまがまがしい黒いオーラがするのは気のせいにしておこう。
「ねぇ、織斑一夏くんと黒沼悠くんっているかしら？」
車内に見知らぬ女性が入ってきた。
「「はい？」」
「君達が織斑くんと黒沼くん？」
「はい」
「そうだが？」
何だか危険な予感がしてくるな、これはなんだか一夏を差し出し俺は逃げるか。
「すいません、俺ちょっと薬飲まないといけないので失礼します」
そのまま逃げることに成功した俺だが、一夏は四人の魔物に化した女子に殺されていた。
「助かった」
「なにが、助かっただ！」
後ろを振り返ると怒った箒がいた。
「俺なにかした？」
「お茶はどうした？」
「ここにあるぜ」
「私があげたお茶を言っているんだが」
「だから、これだって」
「そうなのか！」
「信じてくれ」
必殺！　男のジャンピング土下座！
膝が痛いがこの際気にしないでおこう。
「本当だな」
「本当だ！」

「わかった」
「ありがと箒」
俺は箒に抱きついた瞬間に照れた箒に殴られダウンした。

平和な日常ですか？　たぶんそのはずだが！（前書き）

もしかしたら補習で書けない日があるかもしれません

平和な日常ですか？　たぶんそのはずだが！

「ＩＳのカラーが変わるなんてあり得るのかよ？」
俺は左手の指輪を見て呟いた。
そう、俺のＩＳは第二形態になってから、カラーが黒から白に変わっていた。
「はぁー、考えても意味ないな」
そんなことを呟いると、突然目の前が真っ暗になった。
「！？」
「だーれだ」
このやりとり昔あったような、なかったような？　いや、こんなことをするのは奴しかいない。
「た、楯無か？」
確証はない！　しかしこれが正解なら安全だ！
「せーかい」
「ひ、久しぶりだな」
「そうね、あなたが施設を破壊する二日前だからね、会ったのが」
「そ、そうだったけ！　俺は全く覚えてないな」
逃げたい！　早くここから逃げたいよ（泣）
「お姉さんとお話ししましょ」
扇子を広げて笑顔にならないで！　絶対！　なにか企んでいる顔だ！
「お、俺、今日ようじあるから、また今度な！」
夏休みだからいいが学校があったら箒に殺される！　誰か！　助けてくれ！　一夏でいいから来てくれ！
「嘘は駄目よ」
「今度なにか奢るから、今日は勘弁して下さい」
「しょーがない。また、今度ね」
よし、今日はもう安全だ！　俺の命は助かったんだ！

「近い内に、『亡国機業』とザフトがＩＳ学園に来るかもしれない」
「そのときは、俺が守ってやるから安心しろ」
「狙いは白式よ」
「大丈夫だ、それを含め、お前も守っていってんだ」
「期待してるわよ」
「任せとけ、絶対にお前等をこっちの世界には引き込ませないさ。絶対に」

日常だろ！　多分な！

「おい、俺を何処に連れていくきだ」
翌日、起きたらいきなり一夏に「俺と昼、食いに行かないか？」と誘われ、歩いています。
「着いたら、わかるよ」
着いたら、場所は『五反田食堂』だった。
「此処なのか？　一夏」
「そうだが？」
俺の昼はここでとるのか、いや！　何だ、この感じは！
「来たぞ、弾」
「待ってたぜ、いｔ……お前、何時から彼女持ちになりやがった」
これが、妥当な反応だろう。やっぱ！　切ろうかな、どちらでもいいんがな。
「弾、こいつは男だ！」
「な、何だと！　髪は黒でロングヘヤーの大和撫子みたいな美人が男だと！　嘘っだ！」
「済まないな、男なんだ」
「改めて、五反田弾だ。弾でいいぜ」
「俺は黒沼悠だ。悠って、呼んでくれ」
話しをしながら飯を食ったがすごくうまかった。
「今日、祭りがあったんだ」
「一夏、用事あったから帰るよ」
「じゃあな」
さて、神社に行く前に髪でも切るか。
その後、街では幻の美少年が居たり居なかったり。そんな噂があったのは、また違うお話で。
「変わってないな」
昔、ここで竹刀を振ってたのか。

「よっ」
「……」
「おつかれ」
「ゆ、悠なのか？」
「どうした、箒？」

Ｓｉｄｅ悠ＥＮＤ

Ｓｉｄｅ箒

「よっ」
「……」
「おつかれ」
悠が、いた。
「ゆ、悠なのか？」
「どうした、箒？」
待て。待て待て。おかしい。おかしいぞ。私は神楽を終えてから軽く汗を拭くついでに巫女服に着替えてお守り販売の手伝いに来たところになぜ悠が！？
「キレイだな」
「っ／／／／／」
しかし、悠は髪を切ったからすごくかっこいい。
「熱でもあるのか」
悠のおでこが私のおでこに！　こ、これは、これでいいのだが！
このままでは、悠を襲ってしまいそうだ。
「夢だ！」
「な、なに？」
「これは夢だ。夢に違いない。はやく覚めろ！」

「熱があるのか！　返事をしてくれ箒」
この事態は叔母さんが来るまで続いた。

久しぶり！　消えたんじゃないのか！（前書き）

久しぶりに書きましたが短いです

久しぶり！　消えたんじゃないのか！

「箒、一言ある」
「何だ」
場所は林の中。
「隠していたことがある」
「言ってみろ」
「俺は人殺しだ、それだけは覚えていてほしい。そして、俺はお前を愛すことは出来ない」
「それは、一体なんなんだ」
「教える事は出来ない」
俺は林から出、そこに止まっている車に乗り込んだ。
「よかったの？」
「楯無、俺は裏の人間だ」
「表には出ないの」
「俺はラスボスが好きなんだよ」
「私は応援するよ」
「流石、会長だな」
「入るんでしょ、生徒会に」
「当たり前だ」
「二学期になったら何から始める？」
「一夏の訓練からだ」
「分かった。こちらは、独自でザフトのことを調べるわ」
「仕事が早い女はモテるぜ」
「当分は暗躍か」
「頼むわよ、悠」
「了解」
車が自宅に着いたので降り自宅に入った。
「本当の戦争はこれからだ」

地下の連絡室に入った。
「こちらα応答しろ」
『こちらβ確認した』
男の声が返ってきた。
「ＩＳ学園学園祭にザフトが来る。デスティニー、∞ジャスティスは出撃できるか？」
「行けるぜ坊主」
「わかりました。では、この日までに整備しといて下さい」
「了解」
「それと、ムウさんに学園祭に来れるか聞いといて」
通信を切り俺は闇の中に消えていった。

さあ、お仕置きの時間だ！　笑うことしかできない

夏休みが終わり二学期に入ったＩＳ学園だが、一組には黒沼悠の姿がなかった。
「欠席者はなし（・・）ＨＲを終了する」
千冬姉はいま、欠席者はいないと言った。だが、俺の隣の席はなにもなかったかのように消えていた。
「千冬姉、悠は何処にいるんだ」
「織斑先生だ、黒沼の事はいづれ分かる」
俺は意味がわからないまま集会に行った。
（しっかし、これだけの女子が集まると……）
騒がしい。それを通り越して姦しい。
「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」
静かに告げたのは生徒会役員の一人だろう。その声で、ざわつきがさーっと引き潮のように消えていく。
「やあみんな。おはよう」
「！？」
壇上で挨拶をしている女子。二年のリボンをしたその人は、昨日ロッカールームに現れた人物だった。
俺は思わず声をあげそうになるのをどうにかこらえ、再度その人に視線を送る。
「ふふっ」
一瞬だけ目があって、笑みを浮かべられる。
――――やばい。なんだ、これ。なんかすごいドキドキするぞ……。
そんな動揺を悟られまいとしながら、俺は生徒会長の言葉に耳を傾けた。
「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

にっこりと頬笑みを浮かべて言う生徒会長は、異性同性を問わず魅了するらしく、列のあちらこちらから熱っぽいため息が漏れた。
「では、今月の一大イベント学園祭だけど今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは」
閉じた扇子を慣れた手つきで取り出し、横へとスライドさせる。それに応じるように空間投影ディスプレイが浮かび上がった。
「名付けて、『各部対抗織斑一夏&黒沼悠争奪戦』！」
ばしん！　と生徒会長の頭を誰かが叩いた。
「俺を巻き込むな！」
「てへ！」
出てきたのは青筋を立てた悠だった。
「覚悟はいいか？　たーてーなーしー」
「怒らないで、悠君」
「じゃあ、俺の役職はなんだ？　言ってみろ」
本気で怒っている悠にまだ、恐怖を覚えている生徒会長だ。
「生徒会長補佐だよ」
「だよな！　それで俺に言わないといけないことがあるんじゃないか？」
周りの女子も教師たちも今の現状を止めるものは一人もいない。否、止めたら殺される勢いだ。
「調子に乗ってゴメンナサイ」
「今回だけだ、覚えて置けよ」
悠はなにもなかったかのように学園祭の説明をして、生徒会長の襟を掴み去って行った。
かくして初耳&未承諾のまま、俺の争奪戦ははじまったのだった。

◆

「楯無、覚悟はできてるよな」
私の前にはまだ、怒っている悠君がいる。

「はは、嘘だよね♪」
嘘だと言って欲しい！
「遺言はそれだけか？」
私の制裁は虚(うつほ)が来るまで続いた。
人間って危険な時、笑うことしかできないのは本当だった。

覚悟はできてるか？　いえ、まったく！

「なあ、虚。楯無は何所に行った」
「織斑君を勧誘しに行きました」
虚は顔を青くしながら答えた。楯無帰ってきたらお仕置きだ！
「何で俺が、アイツの仕事をしなきゃいけないんだ」
何で書類がパソコンじゃなく手書きなんだよ！
「大変ですね」
「それと虚、敬語は止めてくれあんたは先輩なんだから」
「それはできません」
敬語で話されると……はぁ。
「……いつまでぼんやりしてるの」
虚が叱ってるのは俺ではなく、目の前に居る本音の方だ。
「眠……夜……遅……」
「しゃんとしなさい」
「了解……、ゆー君が代わりに……くれる」
はぁ、何で姉妹でこうも違いが出るんだ。
「そうか、本音も俺直伝の拷問がいるのか？」
本音は一瞬ビクつき顔を青くして黙った。
部屋の扉が開き入ってきたのは、楯無だった。
「ただいま」
「おかえりなさい、会長」
「覚悟はできてるんだよな？　楯無」
楯無が俺の存在に気づき顔を青くした。
「な、何の事かな？」
「とぼけるなよ、人に仕事を押し付けてお前は何をしていた？」
「一夏くんの捕獲？」
「死刑・か・く・て・い」
俺は楯無の襟を掴み、隣の部屋に向かった。

◆

「えっと、今から何が始まるんですか？」
俺は悠が楯無さんを隣の部屋に連れて行かれ、三年の先輩に聞いた。
「聞いていたらわかります」
先輩の顔は口では言うより聞いて判断してくださいとゆう顔だった。
「覚悟は出来たか」
隣の部屋から悠のドスの効いた声がした。
「それって、私の貞操？」
「ほぉ、まだふざけていられるのか」
「待って！　今のは冗談」
「遺言はそれだけだな」
隣の部屋から悲鳴が聞こえた。目の前に居る二人は顔が凄く青かった。
「でね、交換条件としてこれから学園祭の間まで私と悠が特別に鍛えてあげましょう。ＩＳも、生身もね」
部屋から出てきた楯無さんに説明を聞いたが、俺はこの話は飲まない。
「遠慮します」
「だから、お前は弱いままなんだ」
俺の答えを聞き、悠が喋りだした。
「お前は自分だけでやるから弱いんだ」
「その言い方はないだろ」
「先輩には敬語使えよ、ガキ」
俺は悠の制服のネクタイを見た。そこには、二年の色の黄色のネクタイだった。
「少しは、年上に少しは頼れ、最弱」

「俺はもう、弱くはない」
俺はムカついた。だが、この判断が間違っていたのを知るのはおそかった。
「なら、勝負しようか」
「わかった、負けたら従います」
その時気づいた、楯無さんの顔をが笑ったのを俺はまんまと罠にはまった。
……やってしまった。

戦闘は難しい。　文才がないからな

場所は第三アリーナ
「俺とさしでやろうか」
俺の発言で悠とＩＳでの戦闘になった。
「ルールは簡単、悠君に一回でも攻撃を当てれば一夏くんの勝ち、エネルギーが無くなったら一夏くんの負け」
楯無さんの言葉を聞いたとこ、悠に勝機があるとは思えない。
「いいハンデだ」
嘘だろ！　いくら、近接特化でも今の俺には雪羅が付いてある。
「じゃあ、始めて」
楯無さんの合図で試合が始まった。
Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ悠

雪羅で無理やりシールドエネルギーを使わすか。
俺は一定の距離をとりドラグーンを使った。
「当たれェェェェェェ」
ドラグーンの不規則な射撃に戸惑う一夏だが、セシリアの試合を思い出したのか雪羅の荷電粒子砲を撃ち込もうとしたらがそれはできなかった。
「もしかして、俺が動けないと思ったか。それは、外れだ」
「嘘だろ！」
一夏の荷電粒子砲はビームライフルにより射程が外れた。
「残念、これで終わりだ」
一瞬の隙も与えずストフリの全弾発射を避けきれず終わった。

「下僕、決定！」

この日、一夏に不名誉な称号が付いた。

次行ってみよ！　あの世に送ろうか

「さあ、立ち上がるんだ！　下僕よ」
くそ、何で勝てない相手に勝負したんだ俺は！
「ほら、立てよ雑魚」
約一時間の間、悠からの苛めを受けていた。
「そろそろ、止めたほうがいいと思うよ」
「日頃のストレスを一夏で晴らす！」
泣きそうだよ、姉さん！
「止まるんだ、悠君」
俺の目の前でおきたのは、楯無さんが悠にディープキスをした。
「！！」
悠は何が起きたのか理解が出来なかった。
「可愛いな、悠君」
「お前、人前で止めろよ」
悠は頬を赤くして注意いしただけだった。
「二人はどんな関係？」
あれ、悠には箒がいるんじゃなかったけ？　でも最近、悠の話しをしないような。
「「……」」
二人は顔を赤くした。
「一夏、お前にはまだ早い」
「そうだよ！　一夏くん」
照れてる二人の所に来た、虚さんが説明をした。
「二人は許嫁ですよ、心証証明の」
箒の時にその騒動があったな。
「え！　本当ですか！？」
「本当です。と言ってもお嬢様が「止めて！」」
楯無さんが急いで話を止めた。

「一夏か済まないが、眠れ」
俺は悠に殴られ、気絶した。
Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ悠

「急いで、保健室に連れて行くか」
疲れるぜ、この仕事は。
「そうだね、悠君」
「はぁ、今日はまだ終わらないのか」
「もしかして、私の部屋に夜這いするのかな？」
「いい加減にしないと、喰らうぞ」
楯無に威嚇をしたが、無駄だった。
「やった、悠君に喰われる！　襲われる！」
もう、どうにでもなれ！　みたいな気持ちで保健室に向かった。

目標を撃破する！　後ろががら空きだ！　少年

「～♪　～～～♪　♪……」
耳に優しい鼻歌を聴きながら、俺は次第に意識を取り戻していく。
（う……？）
「いい加減に起きろ！」
俺の腹に悠の鉄拳が撃ち込まれた。
「ぐっふ！」
「目が覚めたか？」
俺の目には怒っている悠がいる。
「お、怒っていませんか？」
俺は恐る恐る聞いてみた。
「良いご身分だな」
俺はかばりと起きると、そこには楯無さんの膝があった。
「ひ、膝枕？」
「正解者には、お・し・お・き」
「ストップ！　嫉妬はダメよ」
楯無さんのおかげで命拾いをした……。
（まずい。まずい、まずい、まずい。何か予感まいたものを感じる。このままだとまずい気がする。）
そう思って先輩から離れようとした瞬間、素早く両手が俺の肩を下ろす。
「のわっ！？」
大勢を崩した俺はふたたびふかふかひざまくらへと。――いや、だから！
「一夏！」
がらっとドアを開けて一声を放ったのは、ラウラだった。
俺と先輩の様子を見て、その表情がみるみる無表情へと変わっていった。

……ああ、終わった。短い青春だった。走馬灯を見る気力も起きないぞ。
「――目標を撃破する」
指先から順にＩＳを展開していたが、悠の拳骨により撃沈。
「目標は一人とは限らんぞ、馬鹿者」
俺はぞっとした。なぜなら、声の質が千冬姉そのものだったからだ。
「きょ、教官」
ラウラはゆっくり上を見て顔を青くしたいた。
「黒沼先輩だろ」
その顔は笑っていなかった。
「じゃあ、話もまとまったところで行こうか」
「へ？　どこに……？」
「第三アリーナよ」
またですか。それにしても、ラウラがまだ悠に怯えているのは驚きだな。

お知らせ

明日から三日間、旅行に行くことになり便利することができなくなります。

ですが、その間も少しずつ書いていくので安心して下さい。

それから、２３日～２５日の間も便利できません。理由はインターシップで神戸製鋼に行くことになり、帰宅時間も遅くなり、活動時間を全て使うことになるので書く時間がありません。以上のとうり、読者に迷惑かけることがあるのでご了承お願いします。

夏休みが明けたら書く時間が全くなくなります。理由は受けなくてはいけない検定がたくさんあるのでそっちの方に集中しないと受かる自信がないのですみません。国家試験は馬鹿にできないほど難しいです。

新章突入！！

「久しぶりに夢を見たか」
暗闇の中、少年が呟いた。
「総帥、総会の時間です」
女の声が部屋に届いた。
「分かった、今からいく」
総帥と呼ばれた少年は部屋を出て会議に向かった。
「どうしたんですか、総帥」
女は心配そうな声で総帥に話しかけた。
「いや、ありもしない夢を見ていてな」
「そうですか、ですがあなたの顔は少し悲しい顔をされています」
「すまない、君に心配をかけるとはな」
その後は会話もなく、廊下にはカツカツと廊下を歩く音しか聞こえない。赤い扉の前に立った瞬間、扉から機械の声が聞こえてきた。
『センサーに影を発見、認証します』
待つこと数秒、扉が開いた。
「総帥、いつもより遅いじゃないですか」
部屋に入ったら、薄い青髪の少年が総帥に話しかけた。
「おいアウル、総帥に失礼だ」
今度は、薄緑髪の少年がアウルを咎めた。
「別にいい、スティング」
「何でしょうか、総帥」
スティングは総帥の方に顔を向きなおした。
「今度の計画はどのようになっている」
「はい、その計画ですが『亡国機業』が現れる可能性がありますが数人の手配が完了しています」
スティングはすらすらと計画を話しているが、総帥はイレギュラーの事を全く持って興味が無いかのように聞いていた。

「分かった、私も行くとしよう」
その言葉を聞いた瞬間、そこに居るもの全員が立った。
「何を言ってるのですか、あなたの顔はＩＳ学園に知れているのですよ」
「少し、勘違いをしているな。私は、この前手に入れたデュノア社の社長として赴くだけだ」
「しかし、それは危険じゃないですか」
「心配する必要はない」
「で、ですが」
「我々の目的はなんだ」
「織斑一夏の抹殺もしくは拉致です」
「それに、こちらには餌がいるんだぞ」
「それでも、信用できません」
スティングは総帥が何を考えているのかが全く理解できなかった。
「なら、僕が一緒に行くよ」
声を出したのはアウルだった。
「これでいいだろ」
「わかりました」
スティングは諦めた。
「それでは、総会を終える」
その言葉とともに他の人は部屋から出たが、一人だけ残っていた。
「どうした、バルトフェルト」
「いやぁ、あんたがここに来るとは思わなかったからな」
男は苦笑しながら話しかけた。
「もともと、ここは俺が創設したからな」
総帥も一人称を変え愉快そうに話した。
「そうだな、黒沼悠」
「いや違うな、今の俺は黒識零（くろしきぜろ）だ」
「ふぅ、お前は面白いな」
その会話は暗闇の中に消えていった。

学園祭！

「ねぇ～総帥」
突然、アウルが話しかけてきた。
「今は、社長だ。それで、どうした」
私はため息を吐きながら返事をした。
「何なんですか、この目線は」
アウルはたくさんの目線に戸惑っていた。
「ここはＩＳ学園だ女しかいないのは当たり前だ」
私は、部下の発言に少し驚いたが……はぁ、疲れたよ。
「すみません」
門をくぐろうとしたら生徒に話しかけられた。
「どうしましたか？」
「済みませんが、招待券を確認させてもらえませんか」
私はスーツの懐から、楯無に貰った招待券を出した。
「済みませんがそちらの方は入る事が出来ないのですが」
「どうしてだい」
「これは、お一人様用になっているので」
なるほどなら、ここは私の実力の見せ所かな。
「済まないね、でもこいつは私のボディガードなんだよ」
「企業の方でしょうか」
「社長です」
とびっきりの笑顔で答えたらすんなりと通してくれましたよ。
「アウル、私が合図するまで遊んできなさい」
その言葉で、アウルはスーツのネクタイを取った。
「これ、苦しんだよね」
「余り会社の名を汚すなよ」
「分かってもますって」
アウルは校舎に向かって歩いて行った。

「もう少し、素直になれよ」
小さく呟いていたら目の前が真っ暗になった。
「だ～れだ♪」
「楯無か」
私は即答した、これも久しぶりだな。
「そっけないな、悠君」
「違う、今は零だ」
楯無は今の私の裏事情まで、すべてを把握している。
「そんなことは置いといて、行こうか」
はしゃぐ楯無に引っ張られて私は一年生の教室に連れて行かれた。
「やぁ、一夏くん元気かい」
「楯無さんと隣に居るのは……お前、もしかして悠か！」
教室に入るとともに一夏に胸倉をつかまれた。
「勘違いじゃないか。私はデュノア社の新社長の黒識零だ」
私は名刺を渡しながら挨拶をした。
「わ、私……ぷっぷ」
楯無はその横で笑いを堪えていた。
「デュノア社ですか」
一夏はおかしな者でも見たような顔で聞いた来た。
「前任の社長が亡くなった（・・・・・）から、株を一番多く所有していた私が就任したんだよ」
「シャル、ちょっと来てくれ」
一夏は焦りながらシャルロットを呼んだ。
「どうしたの一夏？　そちらの方は」
「君が元社長の愛人の子か」
その言葉でシャルは顔を青くした。
「な、なぜそれを知っているんですか」
恐る恐る聞いてくるシャルの顔を見ていたらもう少し遊んでいたい気分になった。
「今の社長が私だからだ」

「父はどうしたんですか？」
やばい！　この顔はとてもいい。
「亡くなりましたよ」
その言葉で何かを吹っ切ったようですが、ここからが面白いと事だ。
「それで、あなたに話があります」
「何ですか？」
「ここに、あなたの父からもらったものがありますので読んでください」
スーツから出した紙をシャルに渡したら、今までよりも酷い顔になった。
「そ、そんな」
「どうしたんだ、シャル……っ！　これは何なんですか！」
怒りが頂点になった一夏はまた、私の胸倉をつかんだ。
「お、落ち着いて下さい、私はそんな物を使うことはしませんから」
渡した紙はシャロット・デュノアの人権だった。
「そうですか」
「それで、あなたにコレを」
渡したのはオレンジ色のネックレス・トップだ。
「これはもしかして」
「そうです。これは、新しく開発したラファール・リヴァイヴ・カスタムＩＩ改。その性能は第三世代を優雅に超えた新しい物です」
このＩＳには、フリーダムで使われていた、核エンジンを積んでいるので要らなくなれば爆発させるだけだがな。
「僕には、これは」
「違いますよ、あなたは企業の顔ではなく、国の名を背負っているのです」
「それは、父のせいで」
「それは、忘れてください。あなたは、今から国の名を背負う者になればいい」

そのまま、説得させ渡すことが出来た。これで、戦争の鍵は出来た。

日常の崩壊前の一時（前書き）

宣言します！　この小説は原作キャラが何人か死ぬ予定があるので嫌な方は次から読まないように！

日常の崩壊前の一時

「少しいいですか」
一夏は不意に黒識に話しかけた。
「どうしたんだい、織斑君」
何だ、この違和感。
「敬語は止めて下さい。見たところ、同い年ぽいし」
たぶん、これだよな。
「済まないね。実際は私の方が一つ上なんだかね」
俺は驚いた。
「なにかすみません」
「謝らなくていいよ。それで、聞きたいことは何かい？」
話が脱線していたせいですっかり忘れていた。
「二人はどんな関係何ですか？」
その質問に周りの空気が凍りついた用に寒くなってきた。
「ただの「恋人」ですよ」
黒識さんの言葉は楯無さんの言葉に邪魔された。
「楯無、いい加減にして下さい」
黒識さんは笑いながら言っていたが、顔は笑っていなかった。
「一夏、何をサボって……悠！」
箒がメイド服の姿でこちらにきたと思ったら、凄い顔をして黒識さんに抱きついた。
「えっ、その人違いじゃありませんか？」
その言葉は箒には届いていなかった。ちなみに、楯無さんは笑っていなかった。
「人違いなわけがない！」
「言われても、特徴か何かないんですか」
「あなたは、似すぎている！」
その言葉に黒識さんは思い出したかのように話し出した。

「それは、もしかしてＢｋ２０１のことですか」
「Ｂ？　Ｂｋ２０１？」
「僕たちの製造数字ですＢｋ２０１はその中の完成品です。私は汚点だらけの廃棄処分されたんですけどね」
この人はたぶん、嘘を言っている気がしたがそれは間違っていた、黒識さんは悲しい顔をしていた。俺はなんで、こんな優しい人を疑ったんだ。
「そうだ、一夏くん」
いきなり声をあげたのは楯無さんだ。
「何ですか？」
「少し、お姉さんに手伝って」
そのまま、俺はどこかに引っ張られていった。この後、起きることがあんな悲惨な戦争になるなんてこの時の俺は知る由もしなかった。

戦闘？

「さて、始めようか」
私は誰もいない屋上で呟いた瞬間、三人の男と一人の女が現れた。
「もう、始めるんですか」
「楽しみだぜ！」
アウルは楽しそうな顔をしているが、その他のメンバーはゲームをしていたり読書していたり女の方は空を見ているだけだ。
「クロト、ゲームをしながら話すな」
「撃滅！」
話を全く聞いていない。
「今回の作戦は『忘国機業』の邪魔をしなおかつ戦争のお膳を立てるだけだ」
「分かった」
女はそこで初めて喋った。
「ステラ、期待しているから」
私はステラの頭を優しく撫でながら話した。
「ステラ頑張る」
「では、楽しんで来い」
それと同時に全員はＩＳを展開し飛んで行った。
「さて、私は楽しませてもらうか」
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「来い！　白式！」
俺はコアを取られたが楯無さんが展開はできると、その言葉を信じて展開したら白式は俺の身にまとってくれた。
「これで行けるぜ！」
と思い零落白夜を発動し相手に切りかかろうとしたときどこから

か砲撃が来た。
「落ちろぉぉぉ！！」
そのＩＳは可変式型のＩＳから砲撃していた。
「終わりってね！」
俺は全く知らないＩＳから攻撃をくらい、後ろを見たらそこにはまた二体のＩＳが現れた。
「お前は危険、ステラ倒す」
「ステラ、アイツは俺の獲物だぜ」
全く知らないＩＳ四機が戦闘を始めた。
「くっ、ザフトの人間か」
「知るかぁ！　撃滅！」
亡国企業の人は全く足も出ない状況だった。
「オラオラオラァァァ！！」
「おいオルガ、邪魔だ！」
「うるさいな」
「何だと！」
その隙に逃げようとするが二人の攻撃に耐えきれず落ちた。
「何だよ、この二人」
俺の前には、黒いＩＳと青いＩＳがこちらに攻撃してくるのを避けるのが精いっぱいだった。それに、楯無さんはどこかに行って一人じゃ不利な状況だった。
「これで終わり」
黒いＩＳから放たれたビーム方が避けれなく終わったと思った時、助っ人が現れた。
「大丈夫、一夏」
それは、シャルだった。
「何だこいつ」
「邪魔者は消す」
敵はさらに殺気を放ってきた。
「行けるか？」

「大丈夫だよ、それより一夏はどう」
「エネルギーが足りないかも」
苦笑しながら呟いた。
「じゃあ、早く終わらせようか」
「だな」
俺たちは戦闘態勢に入るが相手の力量が高いせいか相性が悪い。
「じゃあ、僕は青い方をやるよ」
「分かった、行くぞシャル」
俺は黒いＩＳの方に瞬時加速で駆けだした。

爆発！（前書き）

シャル好きの皆様すみません！

爆発！

「うおぉぉぉ！」
俺は黒いＩＳに雪片弐型のまま斬りかかった。
「無駄」
相手は呟き攻撃をかわし蹴りを入れられた。
「ぐっぁ」
なんだ、アイツら凄い操縦の上手い連中なんだよ。しかも、男が三人もいる。
「総帥の邪魔する奴ステラ倒す」
総帥って誰なんだ、こいつらはいったい何もんなんだよ。
「ステラ、まだ終わってないのかよ」
声の方を見てみるとシャルは青いＩＳに頭を踏まれて動けなくなっていた。
「シャルを離せぇぇぇぇ！」
俺は怒りが込み上がり青いＩＳに零落白夜を最大出力で斬りかかった。
「おっ、危ない」　俺は一瞬の隙もみのがさなく雪羅で相手の胴を掴み荷電粒子砲をぶち込んだ。
「くそがぁぁぁぁ！」
何とかシャルを助けることができた。
「大丈夫か、シャル」
「なんとかね、でもこのＩＳ何だか相手に動きが読まれてるような気がするんだよ」
「故障でもしたのか？」
俺は不思議に思った、新しいＩＳなのにそんなことが起きるのはおかしい。もしかしたら、この戦いは誰かが意図的に仕組んだ戦いじゃないのか。
「よそ見するじゃねえ！」

二つのＩＳが攻撃をしてきた。
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「うん、あの二人は仲が悪いがＩＳの方は順調かな」　屋上で一人の男が時計から出ている映像を見ながら呟いた。
「でも、あの雪羅は少し厄介かな？　ゼロ距離ならの話だけど」
「やっぱりか、悠」
その名を呼んだのは楯無だった。
「どうしたんだい？」
「悠、何であなたがこんなことを」
その顔は悲しみに溢れた顔をだった。
「予想はしていたんだろ」
「少しはね、あなたが臨海学校で消えたのを聞いた時に確信が出来た」
「だから、連絡してきたんだ」
「そうよ」
「なら、君はどうするんだい？」
「私はこの学校の生徒会長としてあなたを捕まえるわ」
楯無の顔からは涙が一粒流れた。
「残念だよ、俺は楯無がこちら側に来ると予想していたのに」「私は生徒皆を裏切ることは出来ない」
「なら、君は捕虜にしてでも持ち帰ることにするよ」
「できるものならね」
その瞬間、風が吹いたかのように周りに風が吹いたかと思った瞬間楯無はその場に倒れこんだ。
「すまない、俺は君だけは死んでほしくないんだ」
その、悲しみに満ちた呟きは誰もいない屋上に静かに消えていった。
「そろそろ、戦争を始めようか」
ＩＳを展開し、四人の回収と戦争の火種を作りに飛翔した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
「やめろアウル、退くぞ」
俺たちに斬りかかってきた二人は声を聞いて動きを止めた。
「う、嘘だろ」
俺たちの目の前には消えたはずの悠がＩＳを展開して現れた。
「僕はまだ、負けていない」
アウルと呼ばれた奴はまだ、戦えると言っていた。
「これ以上戦闘すると教師陣が来る。それに人質は確保した」
悠が抱えていたのは楯無さんだった。
「分かった、今回は退く」
その場から退こうとする奴らにシャルが射撃の大勢をとる。
「動くな」
「その体で、まだやる気か？」
悠は静かにそれも、冷静に聞いてきた。
「君が一夏の大事な友達でも、裏切ったことをここで償ってもらうよ」
シャルは怒っていた。シャルは悠の事は俺と箒の話でしか知らないがシャルはとても優しい人なんだねと笑いながら言っていた。
「お前たちは、先に行け」
悠は楯無さんをアウルに預けて、戦闘態勢に入った。
「おいで、Ｕｎ　ｂｅｂｅ（赤ちゃん）」
その言葉でシャルと悠の戦闘が始まった。
「弱いな、コレが貴様の力か」
悠はビームサーベルだけで戦っていた。
「強い、だけど」
シャルは悠から距離をとり重機関銃をニ丁だした。
「これなら当たるはず」
「そんな物で俺が止めれると思ったか？」
悠は銃弾の嵐を全て避けていた。
「そ、そんな」

シャルの顔を化け物を見ているような顔だった。
「仕方がない、フェイズ２に移行するか」
悠は逃げるかのように飛んで行こうとしたがシャルはそれを許そうとはしなかった。
「逃がすか」
「止めろ！　シャル」
その声は届かずシャルは悠を追いかけていった。
「何でこんな時に限ってエネルギーがゼロなんだよ！」
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「ここら辺で良いか」
飛ぶのを止めた俺はシャルルがこちらに来るのを確認した。
「知ってるかい？」
「何を」
怒りに満ちて思考が回っていないなこれは好都合だ！
「最高の美は何から生まれるかを？」
「！？」
今更、気づいても遅い。
「芸術は、爆発だぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
俺は手に持っていたスイッチを押した。その瞬間、シャルルのＩＳは爆発した。

殺す！（前書き）

皆さんすみません！

殺す！

「ふっ、ザコが挑むからこうなるのだ」
俺は落ちるシャルルに向かい呟いた。
「帰還するか」
その時、俺の横をレーザーが横切った。
「逃がしませんわ」
現れたのはいつぞやの高飛車女だった。
「わぉ、あんな光景を見といて勝負を挑むなんて命知らずかい？」
「デュノアさんの敵ですわ」
はは、頭に血が上り物事を冷静に考えていないね、こいつ死ぬな。
「良い事をしえてあげるよ、戦場で冷静を失った者から死ぬ」
俺はビームライフルでセシリアの武装を全てを破壊した。
「まだ、続けるかい？」
そうだ、いいこと思いついた。
「まだですわ、インターセプター」
セシリアは自分が最も苦手な武器をコールした。
「今回は、君に最高の役をやってもらうよ、これは決定事項だ。」
俺は瞬時にセシリアのＩＳを殴る、蹴る、斬りつけるの永遠のコンボが決まりＩＳの装甲はボロボロになり斬りつけられたところからは浅いが血が出ている。
「どうしたんだい、イギリスの技術はそんなものかい」
声はしない、ダメージを食らい過ぎて気絶をしてるみたいだ。
「呆気ないな、カメラは何所かな？」
俺はセシリアをアイアンクローみたいな持ち方でカメラを探した。
「あった、あった、後はコレを学校全体に繋げてと」
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
「どこに居るんだ！　シャル！」

俺はただ、見ている事しかできなくシャルが落ちたと思われる場所に走っていた。
「シャル、シャル、どこに居るんだ！」
俺は嫌な気になっていた、もしかしたらシャルはもう。
「しゃ、シャル！」
俺は草の上に倒れているシャルを見つけた。
「大丈夫か！　シャル！」
俺は側により心臓の音を確かめた。
「音が小さい！」
その時、小さな声が聞こえた。
「シャル！」
その声はシャルだった。
「い……ちか……」
「ご……めん……ね……とめ……れ……なか……った」
その声はとてもと弱弱しく、今にでも死んでしまいそうな声だった。
「喋るな！　すぐに医務室に連れて行くからな」
「もう……む……りだ……よ」
「無理じゃない！」
「ご……めん……ね……一夏」
俺の腕の中でシャルは静かに息を引き取った。
「シャルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！」
悠、お前はもう許さない！　俺はお前を殺す、　殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す

殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す

殺す。

『皆さん初めまして』

その時、すべてのディスプレイから悠の声が聞こえてきたと思いディスプレイを見ると、そこには、悠がセシリアを片手で持っている姿だった。

『私は、ザフトのボスの黒沼悠です』

その顔をはとても楽しそうに笑っていた。

『唐突ですが、我々と戦争をしませんか？　ちゃんと、理由は有りますよ。多分どこかで死んでいるシャルロット・デュノアとこのセシリア・オルコットはおろかにも私に喧嘩を仕掛けてきたの戦争をしようと思います。ルールは簡単ＩＳ学園の皆さんは織斑一夏が死んだ時点で我々の勝、私が死ねばそちらの勝。どうですか？　開戦は今から三週間後からね。それと、生徒会長は私が貰っといたから、それではまた』

俺は覚悟をした、何が何でも悠を殺すことを。

開戦！

あの事件から三週間、私は邪魔になりそうな組織をできるでけ潰し、組織の人員を増やしていった。
「今日、開戦かこの戦争の規模はＩＳ学園にとどまらなかったな」
今回の戦争に参加の国はロシア、イギリス、ドイツ、中国、日本の五ヶ国になった。
「当たり前だ、これだけで済んだのが奇跡だ」
バルトフェルトは呆れたように言った。
「だが、これだけいれば好都合だ」
「何故そう思う？」
「今回戦争に参加する国は俺達を捨てた国だ、やり返すのなら今回が良いと思ってな」
「お前はそこまでよんでいたのか」
「こうなる事は、最初から分かっていたさ」
「それは、怖いな」
「それじゃ、行くか戦場に」
そのまま、ＩＳを展開し戦場に向かった。
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ＩＳ学園の会議室に俺達、専用機持ちが集められた。
「お前たちは、戦場に出すが異論はないか」
千冬姉からはこの戦争を回避したそうな声が聞こえる。
「俺は、悠を倒せるのなら異論はない」
俺は力強く答えた。
「なぜ、悠が我々を恨んでいるのか話そう、アイツはＩＳが出来るまでは戦争に使われてきた殺人兵器だ」
俺は初めて知った、そんな事があったのがでも、それがどうした俺には関係が無い。

「そして、ＩＳが現れ奴らは処分された。何故だかわかるか」
「ＩＳに乗れないからですか」
セシリアが答えた。
「そうだ、それで奴らの存在が消えたと思ったが研究員はＩＳに乗れないのなら、乗れるように作り変えればいいと思ったのだろう。だが、成功したのは一人だけだ、それが黒沼だ」
だから、あれほどＩＳに恨みがあるかのような目で俺たちを避けていたのか。
「それが、この結果だ」
戦争、それでＩＳに対する恨みを晴らす気なのか。
「織斑先生、俺は悠を殺して戦争を止めます」
俺の発言に会議室に居た全員が驚いた。
「それが、一夏の選択なのか」
箒は辛そうに言った。
「アイツはシャルを殺し、ＩＳ学園を裏切っていたんだぞ」
俺は怒りに満ちていた、殺せば戦争が終わると。
「俺はもう、悠を殺さないと気が済まないんだ」
「織斑」
千冬姉が続きを言おうとしたら、会議室の扉が開き入ってきた教師が息を切らしていた。
「何が、あった」
「大変です、アメリカがザフト側に」
「何だと！」
これはとても大変な事態だ、アメリカはとてもＩＳの操縦者が多く強い。
「それと、ザフトが攻めてきました。今、中国とドイツが応戦していますが、突破されるのは時間の問題かと思います」
そんなに多いのか、いやでもあれぐらいの事をするんだ。
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「ふん、弱いのに出てくるからやられるんだよ」
俺はビームライフだけで戦っている。
「アウル、オルガ暴れて来い」
俺は二人に通信をした、二人の答えは一つ。
『『全力で殺る』』
オルガのＩＳは格闘武器はないが、ビーム兵器の一つ一つの威力は改造して強力になっている。
「この戦争は我々、ザフトが勝ち取らせてもらう」

対決前？

「始めようか戦争をね」
俺は、フリーダムのエネルギーの温存をするため、アークエンジェルに帰還した。
アークエンジェルは空を飛ぶ巨大艦隊で攻撃までできる代物だ。
「さて、ここまで来る事が出来るかな」
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「どけぇぇぇ！」
俺は人を殺すことに躊躇することは無かった。今回の戦闘では零落白夜の最大量力の展開を許可された、そのため敵を攻撃すると相手の腕を落とす事が出来る。
「エネルギーはまだ持つな」
俺は最短距離で相手の懐に潜り込む事を命じられた。
「一夏、先行しすぎだ」
その作戦には箒も参加しているが、今の俺は誰の忠告も聞かないだろう。
「俺はこの白式で悠を断つ！」
その時、空から巨大なビーム砲が落ちてきた。
「何だこれは」
「避けるなよ、当たれよ」
空を見ると、ミーティアを展開した悠だった。
「魔王は玉座に居るんじゃないのか？」
俺は素早く悠に近づき雪片弐型で斬りかかったが、親指と人差し指で受け止められた。
「軟弱だな」
「何だと！」
「まだ、青いって言ってんだよ！」

そのまま蹴られ地面に突撃した。
「いいか、俺はお前を殺す！　この雪片弐型で」
「来いよ、軽く捻りつぶしてやるよ」
「箒」
俺はすぐさま箒を呼んで二対一の状態にした。
「悠、お前は本当にそれでいいのか」
そばに寄ってきて悠に質問をした。
「俺は戦争がしたいだけだＩＳに乗っている奴らに俺らの事を捨てたことを後悔させるためにな」
「それで、戦争なのか」
「俺達は戦闘の為に作られた兵器だからな」
「違う！」
箒は怒鳴った。
「あの時の悠はとても優しかった」
「感情操作されてたからな」
悠の口から恐ろしい言葉がでた。
「何であの時、密漁船があったのかな？」
「あれは、悠の仕業なのか」
「そうだよ、楽しかっただろ？」
あの出来事から仕組まれていたのかこの戦争につながるように。
「一夏が生きてるのは計算外だけど」
やっぱり、こいつだけは許せない。

ありがとう

「お前は、俺が殺す」
「やってみろよ、餓鬼」
俺は瞬時加速で近づき斬るが、簡単に避けられカウンターを決められまた、地面に落ちた。
「直線的なんだよ。そんなんじゃ、俺に傷なんかつけられないぜ」
「まだ、始まったばっかじゃねかよ」
たぶん、悠には俺の行動パターンが分かっているかもしれないがそんなものは関係ない。
「お前の剣技はお遊びなのか？それとも餓鬼のチャンバラか？　答えてみろよ」
「悠、違うぞ！　一夏はお前のようになりたくて剣を握ったんだ。悠に憧れたから」
箒は俺の代わりに答えた。
「憧れねェ。そんなものは屑がする事なんだよ！　憧れ何てェ、捨てちまえ！」
「お前は、どこで間違えたんだ」
「お前の姉貴の所為だな、お前らのせいで俺の生き方が変わったんだ！　ＩＳなんかなければ、誰も悲しまずに済んだかもしれないんだ」
「そうかもしれないな」
箒のことは知ってるが、箒もまだ束さんの事を恨んでるのか？
「こっちに来るか、篠ノ之箒」
悠は箒の方に手を伸ばし言った。しかし、箒の行動には驚いた。
「恨んでいたが、今は私の力になってくれた。私はこの紅椿で止める」
箒は空裂から、エネルギー刃を悠に飛ばした。
「危ないな、シールドバリアーと絶対防御を外しているから今のは

きつかった」
今の攻撃を避けたのかほとんど距離が無い状況から。
「俺にはＳＥＥＤって、能力があるんだよ」
「ＳＥＥＤ？」
俺達は意味が分からなかった。
「判断力、思考力、戦闘能力などが著しき上がる能力だよ」
なんだよ、そんな奴に俺達は勝てるのか。
「さあ、終わらせようぜ」
悠はドラグーンを俺の方に全て飛ばし、箒にはビームサーベルで攻めてきた。
「ＡＩを使わずに操作できるなんて反則だろ」
「反則だと笑わせるなよ、お前らは二人だろ」
俺達は悠に手も足も出ずにボロボロになった。
「おいおい、もう終わりかよ」
俺たちは発言する力も残っていなかった。
「なら、終わりだな」
悠は俺達にビームライフルを撃とうとした時、後ろから何かが悠を貫いた。
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

私は彼の背中から水で形成した槍で後ろから突いた、彼は後ろを向き驚きながら私の名を言った。
「楯無」
「ごめんね。でも、一人で逝かせないから」
私は唖然としている彼に抱き着いた。
「ありがとう。楯無、僕について来てくれるのは君だけだね」
彼の顔は昔見た、優しい顔だった。
「いいの、あなたが幸せなら」
「空が青いよ、早く君に出会っていたらこんな空をずっと見れていたな」

「見れたよ」
私は多分、泣いている。とても嬉しい、昔の彼を見る事が出来て。
「ありがとう。愛してるよ」
「私もよ、悠」
フリーダムが爆発し私と彼はこの世界から消えていった。
side out

あれは、いつの事だったかな。
「早くおいで」
その日は親の都合で僕は更識のお屋敷に来ていた。
「まって、悠くん」
僕はいつものように楯無と遊んでいた。
「そうだ！」
楯無は何かを思いついたのか、勢いよく僕に抱き着いてきた。
「どうしたんだい？」
「悠くん、私とずっと一緒に居てよ」
「何で？」
「私は悠くんが好きだから」
楯無は赤くなりながら言った。
「僕も好きだよ」
「本当！」
「本当だよ。その代り、死ぬ時も一緒だよ」
僕たちは約束をした幼い時に、楯無はその時の約束を覚えていてくれた。

お帰り（前書き）

最後は連続で投稿だぜ

お帰り

あの戦争が終わって三年、俺はＩＳ学園を卒業した。
「一夏、行くぞ」
「分かってる」
俺と箒は黒い服を着てある場所に向かった。そこは、悠の墓だ。
「来たぜ、悠」
その墓は形だけだ、悠はあの爆発の後からＩＳすら見つかっていなかった。
「俺達、ＩＳ学園卒業したんだぜ。知ってるか、セシリアがイギリスの国家代表になったんだぜ、お前最初の頃、アイツに勝負挑まれてボコボコにしてたよな他の奴も――――なんだぜ」
俺は日本の国家代表になる道をえらんだ、箒は候補生になった。
「実はなシャル、生きてたんだ。お前は誰も殺していない優しい奴なんだよ」
俺はずっと、独り言のようにつぶやいていた。
「お前も、どこかで生きてるよな。俺は信じてるぜ」
俺と箒しかいないのにどこからか車椅子を引く音が聞こえてきた。車椅子を押しているのは白いワンピースを着、麦わら帽子を深くかぶった女性と車椅子に座っている男性は帽子を深くかぶり目線が見えない。
「ここに黒沼悠さんが眠ってるんですよね」
車椅子を押している女性が話しかけてきた。
「そうですけど……どちら様ですか？」
ここはＩＳ学園の一部の生徒しか知らない場所なのになぜ、来ることができたんだ。
「昔の知り合いです」
女性の口元は微笑んでいた。
「そうなんですか。でも、なんでここを知っているんですか？」

「教えてもらったからかしら」
「ここは、一般人が知ることは出来ませんよ」
「残念、もう少し遊びたかったのに」
女性は帽子を脱いだ。
「楯無さん」
それは、あの時死んだと思った楯無さんだった。
「キレイでしょう」
楯無さんは髪が長くなっており、大人の女性の魅力を出していた。
「な、なら、そこに居るのは」
箒が震えながら発言した。
「そうよ、えい」
「止めろ、外すな」
その声で分かった、悠だった。
「久しぶりだな」
「そうだな」
久しぶりに話をしたが殺意などは全くわかなかった。
「その足どうしたんだ」
「これかい、ＩＳの爆発で機能しなくなったんだ」
悠は足を見ながら呟いた。
「それよりお帰り、悠」
「ああ、ただいま」

お帰り（後書き）

やっぱり、原作キャラを殺すなんて俺には出来なかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8290u/

IS 黒き自由の翼

2011年9月12日23時42分発行